

清陵同窓会報

御礼とお願い

会長 大森 栄

秋涼の候会員各位にはご健勝のこととお喜び申します。本会は母校創立八十周年記念事業と取り組んで努力を続けてまいりましたが、会員各位の非常なご熱意ご支援をいただき大きな成果をあげて夫々達成されましたので、八十年史の編纂刊行の仕事があとに残ります。が、来る十一月六日開催の総会を以て一応の終結を致したいと思います。私は事務局と相談してこの機会に各学年委員各支部役員のご苦勞に對して感謝状と記念品を差し上げていささかではあります。が、会として感謝の心を

表わしたいと存じ、先般の幹事会に此の事をはかりましたところ、皆さんは会の為に骨を折るのは当前のこと自分達だけがさような物を受けることは困る。お金を出した方も額のちがいはあつても齊しく感謝を申すのと同様であるとの意見が圧倒的でありました。私はこの意見を有難くそのまま受けて此の考を撤回致しました。私はこの会報に於て役員方のご苦勞に對し、又ご協力下さった皆様に對して厚く感謝を申し上げます。

艇庫の移転改築に協力する件であります。それには先ず何としても用地を取得することが肝腎と考え、六斗川に近く市で進んでいるヨットハーバーに並ぶ湖岸にある市有地(約二一〇坪)を市の好意によつて譲渡して貰いました。これには市長さんの理解と五味前市議会議長さんはじめ同窓の議員諸賢の熱心な尽力によるものと真に有難く存じております。

八十年史はおおよそ構想がまとまり詳細な年表ができました。これに基いて資料を蒐集し執筆にかかる手順であります。が、事務局に在つてこの仕事を担当していた原田福太郎氏が病氣になり八月十一日に逝去されると云う不幸があり、やゝ頓挫の状態でありましたが、委員一同結束し決意を新たに立ち上つております。先頃の顧問を交えての委員会に於て資料蒐集に全力をあげて当てるが種々の困難を考慮して執筆を終了するまでの期限を五十四年三月までに延期してほしいとの申出がありこの線を最後の線として努力して貰うことに致しました。

亡くなつた原田委員のことを申したいと存じます。原田氏は幹事会で記念事業を考えあつた最初から母校八十年史編纂刊行を提唱し其の後の話し合ひでも熱心に意見を述べられました。いよいよ実行委員会を設け事務局を置くや氏は事務局委員となり八十年史と会報の仕事を担当されました。生

から暇さえあれば図書館へ出かけ又関係の書籍を買い込んで読み耽り要所を書き取り「やらねばならないことが一杯だ」と眼を輝かせて家族の方と話していた由であります。私との話でも母校の歴史に関する話となり伝統を論じ飽くことを知らぬ風でありました。氏は重篤の病床にありながら思ひは母校に同窓会にぞして年史に馳せつつついで

ご挨拶

学校長 矢島五郎

本年四月伝統ある清陵高校に着任いたしました。以前深志高校在勤中に清陵高との交歓の際に幾度かお邪魔させて頂いておりましたので、往時の記憶が佛然と蘇り、大変懐しい想ひにかられました。深志とは学校の雰囲気極めて類似しており、目指す理想も、共通かと存じますので、かつての経験を生かして清陵高校の一層の発展のために微力を捧げたい所存であります。に逝去せられました。まことに痛ましく残念至極であります。八月二十日にご葬儀が行われました。本会では鄭重に弔意を表わし私が会を代表して弔辞を捧げご冥福をお祈り申しました。会報第三号が発行されるに当りご挨拶と会務の一端を申し上げます。会員ご一同の一層のご健康とご発展を祈念申し上げます。

この三月には鉄筋二階建の格技室が完成し、近く女子生徒の増加にもなつて家庭科教室も鉄骨二階建で完成する予定になつておりますが、現在の校舎や体育館などはかなり老朽化しておりますので、近い将来には校舎の全面改築の必要度が高まつております。生徒諸君の毎日の勉学活動を一層効果あるものにするため、この問題に關しては、今後真剣に取組んでいく必要があると考えております。これは勿論県教育委員会の仕事ではあります。が、その際にはまた同窓会の皆様にもご支援を賜りますようお願い申し上げます。輝い伝統を有する母校の一層の充實発展のため非力ではあります。が、精一杯の努力を傾ける所存でありますので、今後とも一層のご支援をお願い申し上げます。

記念事業の終結を迎えて

実行委員会事務局 石井 睦 蔵

創立八十周年記念事業は、会のことなど至って無関心記念大総会、会員名簿発行、だから、余り一生懸命にな財団法人「諏訪清陵会」設立、艇庫敷地買収、募金等その大部を終了し、残すは八十周年の発行だけとなりました。特にむずかしいと思われた募金は、目標の二倍を越す八、三〇〇万円という額に達しました。こうして予期以上の成果を挙げ、この事業が終了に近づいて

② 若い年代の同窓生の参加協力を得ること
地区単位の各支部の協力を得ること

④ 働き盛りの年次を含めて実行力のある強力な事務局を組織し、推進力とすること
等であります。

こうして始まった第一の事業である記念総会は、一八〇〇名にも及ぶ方が出席して下さるといふ熱気を帯びた大総会になりました。

この瞬間、引続いての他の事業も必ず成功するとういう自信を深めました。そして今回の記念事業の中心をなす募金についても、記念事業の目的をより大きく達成するため、当初設定した目標金額五〇〇万円を大幅に

増額して四、〇〇〇万円とすることにいたしました。この決定をみたのは総会二ヵ月後(昭和五十一年一月)の実行委員会においてであります。そして直ちに募金作業にかかったわけですが、一年半後の今日、更にこの倍額以上の金額に達したというわけでありませう。記念総会におけると同様、ここにおいて全同窓生の心は一つ、母校を思い、同窓会を思う心の大きさが示されました。そして、一部同窓生の方の抱かれた「諏中・清陵の卒業生は…」というような自励の念は、全くの杞憂に過ぎないことが実証されたわけでありませう。

① 既に強固な結束をもつ

であります。溢れ出した人々は茅野、下諏訪まで足を伸べております。

そして、この記念総会を機に、これまで絶えていた学年会が復活し、また新年会が始まったというような声をたくさん聞いております。学年だけでなく各支部の活動も活潑になり、また幾つかの地方支部が誕生しました。

その後の学年単位、支部単位の募金運動も、その結束を強める結果になったかと思えます。

この後の学年単位、支部単位の募金運動も、その結束を強める結果になったかと思えます。

ひいては同窓会全体の結束を強め、心のつながりを拡げてきました。このことは今回の記念事業が完遂されたいこと以上に意義深いことかも知れません。

ここで八十周年史刊行の事業だけが残ります。これについては事務局八十周年史担当の原田福太郎氏が去る八月十日に亡くなられ、誠に残念なことではありますが、若干の遅れはあろうかと思

います。立派なものが刊行されることと期待いたしております。

ここに絶大なご支援ご協力を賜った各位に対し、会報誌上を通じ心より厚く御礼申し上げます。そして同時に、事務局一同お互に多忙の中のこととて不届

の点多かったこと、また夢中のみ失礼の点多くあつたことと思ひ、この点特にご寛恕くださいますようお願いいたします。

その後の学年単位、支部単位の募金運動も、その結束を強める結果になったかと思えます。

ひいては同窓会全体の結束を強め、心のつながりを拡げてきました。このことは今回の記念事業が完遂されたいこと以上に意義深いことかも知れません。

ここで八十周年史刊行の事業だけが残ります。これについては事務局八十周年史担当の原田福太郎氏が去る八月十日に亡くなられ、誠に残念なことではありますが、若干の遅れはあろうかと思

います。立派なものが刊行されることと期待いたしております。

います。立派なものが刊行されることと期待いたしております。代金は七百円です。

です。希望の方にはお預けいたします。代金は七百円です。

*会報第三号をお届けすることが出来ました。あれやこれやと考えては見ましたが、肝心の原稿が集まらずというわけですね。

*半年一度の会報ですが、どうか諏訪中学、清陵高校に学んだ思い出、あるいは社会へ出てのその後の同級会などの動き、どしどし次号にはお願いいたします。

*八十周年記念事業も終りの段階となりました。しかし、会報は続けていくことになっていきますので、これを紐帯として母校や同窓会の事業にお互いに協力していきたいと思ひます。

*十一月六日の同窓会には、沢山の方たち集って、旧交を温めたいと思ひます。どうか盛大でありますよう

兼太郎

八十周年記念のネクタイピン、また多少の残りがあ

事務局より

今回、八十周年編さん室が学校正面玄関横の部屋にでき、それと共に事務局もそちらへ移りました。今度は今までもよりも幾分広く快適ですので、ぜひ気軽に立寄り下さい。電話〇二六六五・一八〇三五六 五味兼太郎

八十周年記念のネクタイピン、また多少の残りがあ

衣ヶ崎の変容



「ふるさとの山に向ひて
言ふことなしふるさとの山
はありがたきかな」「かくに
かくに渋谷村は恋しかりお
もひでの山おもひでの川」

はいずれも石川啄木の歌で
ある。故郷のよきはそこを
離れてみないとわからない。
ふとしたはずみに無性に懐
かしく思い出されるのがふ
るさである。

同じ諏訪に生活してい
ても、満遍なく外を出歩いて
いる人ならいざ知らず、そ
うでもなければ「あれ、こ
こがこんなに変わっている」と
と驚くことがしばしばだ。
テンポの速い地域社会の動
きについて行くには骨が折
れる。そんなあんはいだか
ら故郷を離れて暮らす人が
たまたま帰省すると、あれや
これが目について、土地っ
子とは違った感慨にひたる。
「昔の諏訪の方がはるかに

よかった。ふるさとは死ん
でしまった」と慨嘆する人
もいれば「これならオレ達
が育った時代と違って、田
舎っぼだとバカにされず
に済むだろう。開けたもん
だ」と変なほめ方をする人
もいる。評価はどうであれ、
みんなが故郷の移ろいに、
関心を持って居るのは否め
ない。

「春城上の春霞、白帆の
かげもほのかなる、衣ヶ崎
の朝ぼらけ、芙蓉の峰を望
みては、昔しのぶの石垣に
みやびの胸の通ふかな」と
校歌に歌われる衣ヶ崎付近
を中心とした諏訪市側湖畔
の近況！

衣ヶ崎とは衣之渡川が諏
訪湖に注ぐ辺りを言う。校
歌が生まれたころは建物な
ど何もなく、岸には葦が茂
って美しい眺めだった。東
洋バルブなどもちろんあろ
うはずがない。それが現在
では西側へ街が延びてホテ
ルやパチンコ店、ゴルフ練
習場、住宅などがギッシリ
と建ち並び、昔日の面影は
全々なくなつた。

いたこともあつた六斗川の
川先辺りが、これから最も
変ぼうする地帯ではないか
とされている。遠浅になつ
ていた地域を埋め立て、ヨ
ットハーバーが生まれた。
この施設は、来年開かれる
「やまびこ国体」のヨット
競技会場に供される。埋め
立て地は現在、駐車場にな
つて居るが、ローラースケ
ート場にする計画もあるら
しい。

その隣接地が清陵高校創
立八十周年記念事業の目玉
として確保した艇庫用地で
ある。そのうちに艇庫では
もつたないという論が起
きるかもしれない。

六斗川を越した豊田地籍
には現在、諏訪湖流域下水
道の終末処理場を建設中で
ある。諏訪・岡谷・茅野・
下諏訪の三市一町の下水を
全部処理して諏訪湖の浄化
を図ろうというものだ。下
水道の支線まで完工するの
はずと先だが、完成の暁
には今よりまし湖になる
に違いない。

が出来、だいぶ整備されて
きたのは大方の会員の皆さ
んご存じだろう。それが近
くまた一変する。現在、遊
覧船・白鳥丸の棧橋になつ
ている寺島園から小松園に
かけて付近一帯の埋め立て
計画が進んでいる。通称・
真珠湾と呼ばれる食い込み
がなくなる。土地利用にも
問題はあがるが、諏訪湖を入
間の身勝手小さくさせて
いいものだろうか。今に大
罪が当たりはしないかと心
配である。

それはともあれ、諏訪市
も今年から五万都市になり、
郊外の田園地帯に住宅や事
業所が陸続と建設されてい
る。「十年一昔」と言うが、
土地に住んでいても「今様
浦島」の悲哀を味わわれ
る昨今である。

（写真）変容する諏訪湖畔
の遠望。○印は清陵高校艇
庫予定地

昭二会便り

九月二十五日（日）午後
一時より、茅野市頼岳寺に
おいて、物故会員の追悼慰
霊祭をかねて同級会を開い
た。物故会員は今日現在す
でに八十三名を数え、導師
岩本智堂住職（同級生）に
よりの執り行われた。集つた
会員は東京地区及び地元各
地より四十名、あまりの懐
しさに感無量、今昔の感に
耐えなかつた。又都合によ
り出席出来なかつた会員五
十名の内十七名が何んらか
の健康上の障害があること
も判り、淋しさを禁じ得な
かつた。くれぐれも御自愛
を祈る。

懇親会を、たてしな会館
（両角久彌君経営）に移し、
懐旧談に時のたつものも忘れ
盛会裡に終了した。席上昭
二会を組織化し、当番を岡
谷に移すことになり、左記
役員が承認された。
今後会員の動向について、
迅速に情報を提供される様
御願ひして、お便りと致し
ます。

▽会長山岡利平▽副会長
永田宗敬（諏訪地区）矢崎
亀重（茅野地区）篠原仁蔵
（東京地区）▽会計花岡忠
雄▽事務局林憲一。



大森会長叙勲祝賀会

去る四月二十九日、大森先生をお作りになった業績は不誕生日に五十二年度「春の叙勲者」が政府より発表され、わが清陵高校同窓会長大森先生の長年にわたって教育界に尽くされた功績が認められて、栄有る「勲四等旭日小綬章」をお受けになった。

先生は生涯を通じ長野県教育のために多方面にわたって貢献され、その中でも特に戦後の教育改革に当って、今日の中等教育の基盤

をお作りになった業績は不朽であり、高く評価されていることは周知の通りである。今回同窓会・学校においては先生の叙勲を心から祝福し、去る六月二十七日、諏訪湖畔のレストラン「はつしま」において先生の叙勲記念祝賀会を開催した。

夏の日差しが湖上に紅い影を落とす頃、元氣な大森先生を囲んで高々と祝杯の盃がかかげられ、参集者一同喜びを分かち合った。

山田六一副会長の開会のことは始まり同窓会常任幹事の石井睦蔵、井上彦次、会員長老小平善幸さんらの御祝辞、小菅重男前校長の大森先生の御紹介、矢島五郎現校長の祝辞などつぎつぎに、先生が長年にわたって教育界に尽くされた偉徳を顕彰し、先生の胸元に大きな花束が贈呈されると、一斉に拍手が湧き起った。

ひきつづいて大森先生は半世紀以上にわたって歩いてこられた感懐を述べられ、今回の催しに対する謝辞をお述べになった後、燦然と輝く勲章を披密された。

この祝賀会に東京支部より副会長の小口慎三、尾沢賢一さんら遠方より臨席され、同窓会役員を含めて四十五人、学校側から職員十七名、計六十二名が喜びを共にした。

終始和やかな雰囲気の中に予定の時間はまたたく間に過ぎて、最後に全員で高らかに校歌を斉唱し、参加者の中で長老竹内丈夫さんの音頭で万歳を三唱し、盛会のうちに幕を閉じた。

返信短信
東京支部

ひところの総会案内の返信がきは、通り一べんで「欠席」が多く、返信率もよくなかったが、近年は何か一筆書いた返信が大へん多くなった。

9月27日の東京総会の返信のなかから、その一部を拾ってのせて頂く。

- ※歩行困難 欠礼 乞御 海容 5回 今井文平
- ※うまくはならないが、ゴルフのおかげで元気で、各位のご多幸をお祈りしています。18回在諏訪 古村敏章
- ※8月下旬卒業後始めて50周年ぶりで学校をたずね牛山(伝造)先生のご子息がおられ、三沢文庫など案内して下さった。三沢文庫又は清陵図書室に銘々の著書又は愛読書を送ること
- ※何分にも青森、今度は

- を提案したい。23回 杉並区 中城龍雄
- ※来年の国体のモニユメントを引受けて、目下制作中です。ご声援下さい。24回 小平市 矢崎虎夫
- ※とうとう生涯をデモシカ先生で通しました。よかったですと思っています。皆さんによろしく。25回 大宮市 太田和彦
- ※夜間の会は、なるべく遠慮しております。あしからず。ご盛会を祈る。18回 横浜磯子 三輪知雄
- ※9月25日諏訪にて東京・諏訪の合同クラス会を開きます。東京支部年会費についてのもとき相談します。28回 佐野富士雄
- ※当日職員の結婚式あり主賓として祝詞(多分のり)と調をのべることになっていてまことに残念ながら。33回、日光東照宮内、矢島清文
- ※いろいろご尽力の程深謝いたします。今回は一寸都合つきませんが、次回は早目にお知らせいたいたいで出席致し度く。31回 上尾市、浜正太郎
- ※秋肝臓をいたため、7月退院、もう少し療養を要するので、残念乍ら今回は出席できません。39回 上諏訪 藤原正男
- ※いつもご苦労さまです。またスネかじりの身ですものからひろいました。
- 東京の総会には仕事の都合で、出られませんが、郷里大会にはぜひ何とかして出席したいと考慮して居ります。ご通知の東京支部年会費本日10年会員ということに二万円現金書留で送りました。お世話役まことに苦労さまです。35回 青森津軽 加藤幸男
- ※52・55回卒業後25年の同窓会を9月10日上諏訪でたのしくすごして来ました。10月29日諏訪湖一周にさそわれて考慮中。皆さんも参加されませんか。先輩の参加大歓迎をさうです。52回 大谷博
- ※戸田にナックル・フォアア二杯使えるのがあります。ご希望の方は何時でも。諏訪湖より水がきれいです。7回七会(67回生)で一度乗ります。会費68回ワイルドの分も送りました。
- ※息子を代理出席させます。在岡谷 34回等原新作
- ※まだ教員をしている悲しきで、火水木はおそくまで講義があり、休講はまずいので今回は欠席。10年会員になり一万円送りました。よろしく。22回白川今朝晴
- 10年会員(年会費千円を十年度一度に払う)になれなくすみません。72回 柏市 有賀邦男
- ※8月異動により本社人事部(八十二銀行)にもどり、9月9日の北信支部総会あり、そのほうに出席しました。今後ともよろしく。61回 在長野 高見沢忠明
- ※事務局の日頃の苦心お察しし深謝します。(希望)同窓生の就職先業界別会社別名簿を作して下さい。作業は困難と思うが、その代り名簿代は一万円でも高くない。それだけの価値を發揮することを本部にも要請されたし。56回 守矢徹生
- ※個展会期中につき今回は欠席させていただきます。36回 田無市 藤森英治

岡谷の人脈

34回 笠原新作

鞆を抱く様にして岡谷のの先生であった。温の夕
駅に駆足、中央通りに入り イブであるが、今流で云え
石浦写真館をすぎ宝座の前は権力意識があったと思っ
て出て、やっと改札口から 岡谷地方でも有名な製糸工
マツチ箱の汽車に乗り込む 場の労働争議があつて、大
これが毎日でした。振子の きな旗を立てて、市中行進を
様に動き、窓ガラスの小さ した時である。

いのが印象に残る。下車す 明治二十八年全国唯一の
れば前方は男子後方は女子 実科中学が発足して、当時
整然と通学し、上級生に会 入学者六十九名、卒業生は
えは挨拶もしたものである。五名であったと記録に残る。
昭和多年入学したボロ校舎 六百万円の浄財を集めて建
は、今は無く新しい柔剣 設されたので諏訪人の教育
道場が新築されて居る。ふ が如何に熱心であつたかを
と見ると女子学生が柔道を 思い、先輩各位の努力に敬
練習している。女生徒も全 意を表したい。爾来卒業生
く男性化しているわいと内 は一万数千人に及んでいる。
心恐々である。いつ誰が作 岡谷の同窓会が年々盛大
つたのか知らないが、板倉 になり、毎年式百人以上の
校長のお医者さんホイ、あ 各位を迎えて盛大になつた
これは産科が婦人科がホイホ ことは悦しい。古き先輩宮
イ。一年生坊主の吾々は、 坂(健) 今井与波、今井
校長排斥運動の中に巻き込 (梧)、片倉武雄等名物男
れて居た。授業をやめて がないのは歲月の流れで
全盲校庭で校歌を高唱した であろう。会の発足は中央通
のである。校長先生は当時 りで薬局を経営する大和秀
としてはハイカラストایل 雄さんが世話人となり、当

時諏訪湖一週の折に水砂糖
を用意するため会合が開か
れたらしい。記録や写真で
判断したが、当時市の階上
広間や塩嶺等を利用して会
合している。大和さんは演
説もうまくなくボツボツと
話かける風彩の人であつた。
岡谷の盛衰は製糸業と関
連がある。諏訪藩の士族の
娘さんは伝習生として働ら
き、富岡製糸及び松代製糸
の発展后天竜川湖畔に始ま
つた小さな製糸工場がその
基礎である。当時の若者は
長男は生糸業、二男三男は
夫々先生を志望し、陸海軍
人を志望した様である。渡
辺元得、笠原八百七、武井
与一郎、小口吉左門等
あり、上京組の笠原逸三、
山岡武、今井登志喜等多く
の先人の姿である。製糸業
の先代は平野村の人口七万
今日精密工業の盛んな所で
約六万人で、今井、宮坂、
林三代の市長達はいづれも
岡谷魂を叫ばれた。諏訪中
学の実業剛健の精神である。
政治的には風格ある今井、
道路市長の異名ある宮坂、
企業再建の鬼である林いづ

れも岡谷発展に尽した大先
輩である。今日小型市長に
なり革新風をなびかせる風
潮の中に清隆生田出よの声
しきり聞えて居る。物故し
た会長の中に笠原英一氏が
いる。本屋さんと、酒よし
女よし座談上手で有名。諏
蚕を初めて甲子園に出場さ
せた御子柴さんもの当時
の人である。現会長の林憲
一さんは南京攻略の勇将で
あり、現ライオンズクラブ
のチャーターメンバー。一
度先輩各位の慰霊祭をした
いと言っている。数えて見
ると多くの学友級友が物故
して居る。
照光寺の住職の宮坂さん
に哲学を、林さんに野球部
廃止の話を一高退学の赤化
事件等々各位から聞かせて
もらいたい話は山積してい
る。
八十周年を境に同窓会は
盛大になり、諏訪の藤森君
下諏訪の石井君等陰の努力
者を多としたい。
在京各位の同級生と郷土
にある吾々が常に心が通
い合い共々発展することが
念願である。

とん氏 曰わく

「長善館有難う」

また名簿作製の任に當つ
た古原源之助君も昔は諏中
の陸上競技部の名ランナー
であつた。同君の努力に感
謝したい。岡谷同窓会に常
館生に當つてみましよう……
と電話をきると、とたんに
今度は支部長の小口さんか
ら電話。別ルートで数人か
らこの件の依頼が集中した
支部長は、私にラジオで輸
血のアージエント・リクエ
ストをしてもらえないかと
のご相談である。

朝早く岩波書店の保証さ
んから電話だという。ここ
数年同窓会事務所の取次を
やっているの、家内は幹
事さんの声はたいがいきき
わかる。
受話器をとるといきなり
緊張した声で「尾沢さん、
B型の輸血のできる人、5
・6人至急みつめてくれま
せんか。B型ですよ。」と
いう。これには驚いた。て
つきり次の幹事会の会場の
ことだろうと思つていたの
に、オヤオヤ支部は血液銀
行ぢあないんだが、然し事
は人命に關することらしい。
誰か事故でもあつたんです
かと聞くと「ネエ、あのト
ン氏、知っているでしょう。
漢文の、スワ中の先生。あ
するこつたになつていたので

の先生がねえ……」と断片
的に答がはねかえり、だん
だんきくと些細判明。
つまり恩師小沢俊雄先生
が横浜の病院で手術をされ
るについて、ご親戚で八方
手をつくしているが、B型
輸血がなかなかみつからな
い。奥様からのご依頼があ
つた。何分にもご老齢、普
通の保存血液でなく、輸血
しながらの手術になるので
生身の人間を手術室に連れ
てゆかねばならない。それ
もなるべくなら若い人がい
い。輸血手配出来次第手術
をするということであつた。
「分りました。ご病氣心
配ですね。丁度今晩長善館
に出掛け学生の就職相談を
することになつていたので

次ページへ続く

前ページより

先生は一月半位でお元気に訪中の東京大学院みたいなものなので、同窓先輩との対話もツアーでいけたが、

今長善館には清陵卒業生は二割位しかない。諏訪に関係ない館生もかなり居る。小沢先生のごとは、おそらくほとんど館生は知らないであろうし、今の学生

氣質、母校だ諏訪だと縁故をもち出していても、果して簡単にOKするだろうか。第一B型はとも少ないと

いうから、館生の中に何人見つかるだろうか……と、心配しながらその晩長善館に出掛けた。(戦后長善館は大家から引越して、京王線で新宿から30分位の仙川

駅で下りて8分位、桐朋学園のすぐそばにある) 館生全員に集ってもらって事情を話したのんだ処

幸い6人のB型がみつかりしかも全員が心よく輸血に

応じ、早朝の横浜行を承諾して呉れた。誠に有難いことであった。

手術の結果はきわめて順調、悪性のものでなく、

長善館についてまた館生の就職先などにも、あたたかな手をさしのべて頂くよう、よろしく願います。

美術館の日だまり

藤森治幸

善光寺は長野市の象徴でもあります。全国から毎年数百万人という善男善女が参拝に訪れるといえます

から、日本一のお寺でありましょう。私は長野へ赴任してすでに足かけ十七年、

そしてここ五年間は毎日善光寺の境内を抜けて通勤しています。「一生に一度は善光寺詣りを」と願う人々

から見ればまことに果報者といわなければなりません。

私は現在、長野県立の信濃美術館に勤務しておりますが、この美術館は善光寺

の本堂の檜皮葺きの屋根が緑の森の間に見えかくれする城山公園の一角にあります

して、なかなか環境の佳い場所です。春から秋の終りまで噴水のある丸い池の

周囲は、季節の花が植ええられ、名物の時計も風情があります。子供連れや

アベックからお年寄り、それに時折り幼稚園児から中学生までのことも遠が校外

学習やピクニックで訪れ、木蔭や芝生で弁当を使った

り、遊戯をしたり楽しい賑わいも見られます。

ところがまことに奇妙なことに、この人達の大部分は目と鼻の先にある美術館

の階段を登ろうとしないのです。(誰でも目につく大きな垂れ幕が下っているのに) 決して入場料の二百円

(高校・大学生七十円、小学生五十円) が惜しいわけでは無いと思います。

日本人の間には、まだまだ美術館は特殊な人が行く場所、散歩がてらにすぐれた美術作品に接して心の洗濯をしたり、何か一つでも新しい知識が身につけばと云うような気楽さが一般

親たちの考え方や行動というものが子供の心に根を張って、成長するにつれて表面化して行くことは誰もが

経験されていることだろうと思えます。三つ子の魂百までも。重百まで踊り

忘れず、という古語は教育の根元をついたことばとして味がありますが、博物館

(美術館を含めての総称) 通いが気楽にできる習慣といえますか、いずれにしても博物館に対する、理由なき抵抗感を払拭すること

は現代社会、特に日本においては大変なことであろうと思えます。

日本人は、食わず知らずである反面、ゲテモノ食い、です。人真似ずき、の物

見高い人種であります。このように日頃足の遠い博物館へも「モノリザ」が来た「ピカソ」が来たと言え

ば、ワンサと押しかけるのたのか、はどうでもよいので、〇〇展に行ってきたこと、自己満足をしている

「声」を見に行く、極端にいますと人を見に行くような状況が多いようです。この現象は喜ぶべきか、悲しむべきか、多くの人が博物館に足を運ぶ、そして博物館というものに少しでも接

してアレルギー体質を改善するよすがになるとすれば結構なことでしょうか……

私はこの現象は、観る側にだけ原因があるとはいえないと思っています。博物館(国や地方公共団体を

含めて)にも大いに責任があると思えます。むしろ我が国の文化行政にも問題があります。文化事業は国民

生活に直結するものではないという誤った行政意識がないとは云えません。道路、住宅、食糧、福祉などの事業を優先して、それが済んだら文化面に手をつければ

良いといった意識です。これは物心両面というように、物と心は一体のもので切り離すことができないという

大切なことを忘れてしまっているのです。又博物館経営を営利企業なみに考えて

社会教育施設であることに

は殊更に目をつぶって、客寄せ的な展覧会にはカネを出す(収入の見返りがあるから)本質的なものにはカネを出し渋る傾向も強いのです。

もう一つ見逃すことができないのは、マスコミが役買しているということ。ニュースバリニューが少ない記事は載せたがらない。

従って文化的記事は片隅にちまっているから人々の目につきにくい。目につく

大きさのものは客寄せ的な種類の展覧会が多いです。マスコミは天下の利器であり、社会の木匠ですから、

もっと常時地域の博物館に地域の人々が関心を持つような報道を心がけて、地味

で気の長いことではあります。が、民度を高め確実に将来の稔りを期待できるような文化活動面へのバックアップをすべきではないでしょうか。

何か大変苦しい話になりましたが、いささか我が田に水を引いて見た次第です。(40回生・長野県信濃美術館長)

われら激動 の中に学ぶ

功刀 剛

昭和五年（一九三〇年）

四月、我等二〇〇名は、詠
中に入學した。中学へ進学
したことが、各自の人生に
おいて何れ程の意味合を持
つものか、正確な認識を抱
いて居た人は俱らく渺かっ
たに違いない。白線二本の
制帽と朴齒の下駄はき姿が

いさゝか誇らしげであった
程度の感慨であった様な気
がする。然し、山家出身の
小生などは、寧ろ学校の雰
囲気、学校の授業そのもの
に却々馴染めず困却して居
た。そんな中で、蓮田善明
先生の印象が鮮烈であった。
ロマシナシズムの象徴の様
に思えた。戦後、先生があ
の様な劇的な最後を遂げら
れるとは、当時誰が予想し
たのであろうか。然し、先
生は既にあの頃、日本の將
来に暗い予感を持って居た

のかも知れない。

昭和五年は、金の輸出禁
止が、解禁され、浜口雄幸
首相が東京駅頭で狙撃され
た年であり、翌昭和六年九
月十八日には満洲事変が勃
発すると云う政治、経済と
も誠に不安定な状況下で、
軍部の対満政策が露骨化す
ると共に国民の自由が次第
に窒息させられて行く、謂
わば物情騒然、の時代であ
った。然し、我等新入生は
大人の思惑とは別に、また
日本の前途に無邪気に光明
を見て居た。

の一月、斎藤隆夫代議士が
それについて多くを語らな

爾軍に関する国会演説で国
民の感動を呼び、同年八月
永田鉄山中将 相沢中佐
に斬殺され、更に翌年二・
二六事件発生と云う時代背
景は、我等の前途の波乱を
予告するものであった。卒
業式は型どおり終り、その
夜有志の何人かがオデオン
座側のカフェエウニスで、
嬌風会の恐怖からも解放さ
れて、生れて初めて脂肪の
香に酔い、別盃を酌み交し
たのも今は夢、それが今生
の別れとなった人も居た。
昭和五年（一九三〇年）
七月現在、物故された同級
生は七〇名を超える。大方
は戦争犠牲者である。直接
間接の差はあるにしても、
四〇数年前の学生生活を偲
べば、故友はそのままだに
佛とする。死の実感が無い。
その他同級生は、大別し
て東京及びその周辺と郷里
に夫々健在である。現在生
き残った者は悪運が強かつ
たのか、過酷な戦争と、敗
戦の混乱を生き抜いた夫々
の人生には、夫々のドラマ
があったに相違ない。友は、

それから五年間、一応は
嵐の圏外で比較的恵れた学
生生活を過し得たのではな
からうか。独り、在明中尉
と田中行雄先生が、時局を
憂えて張り切って居た。英
語の児玉兵一郎先生が、授
業中の徒然に、KISSの
仕方を教しえたこと云って物
議をかましたのも、今は一
つの牧歌である。
斯くて、昭和十年（一九
三五年）三月目出度く卒業
を迎え、一同は夫々に自己
の運命の展開を求めて清水
丘に訣別を告げた。この年

が あったに相違ない。友は、
（在京・36回生）

COLLECT CALL FROM TOKYO SHIBU

国際電話には便利なものがある。パリの息子から「COLLECT CALL」をやられた。つまり電話料受信者払で、おやじ負担のシステム。彼は安ホテルのベッドにねころんで、「OVERSEAS CALL TO TOKYO. THIS IS PERSON TO PERSON CALL. MY NAME IS S. OZAWA...」とやればよい。時差ぐらいは考えただろうが、折から近所のみ屋に行っているおやじの処まで電話がおいかけて来た。料金は馬鹿にならなかったが、久しぶりに聞くむすこの声にはかえられない。

東京支部でもいま COLLECT CALL をやっている。こちらの方は 今年から再開した支部年会費（1000円）のコレクト・コール。正確には「CALL FOR COLLECTING ANNUAL FEE ON LISTED TOKYO SHIBU MEMBERS」というべきかもしれない。9月27日の支部総会の案内はがきで、送金を依頼、いまぞくぞく集って来ている。まだの方は「PAY RIGHT AS YOU GO」（送金は郵便振替で）東京支部会費のご送金には回別またな入学年度を付記して下さい。

★HONOURABLE 10 YRS MEMBER
毎年総会のときに1000円を送金するのはめんどろ。清陵のたまり場（支部事務所）が早く出来るなら、10年分10000円をいまずぐ払ってあげよう という ありがたいヴォランティア大歓迎。10年会員に推薦申し上げる。これも PERSON TO PERSON で おすすめ合いくだされば幸甚。

★SERVO TOKYO SPOT
支部総会の返信に こんなのがあった。「われわれは いま仕事が一番のしいと時で、寸時をしのんで仕事に打ち込んでいる、従って懇親会はロートルの皆様におまかせするが、いずれわれわれが級友をなつかしむ時が来たら、大いに活躍したい。それまでは、欠席悪しからず。72回生 支部幹事級会委員 下記5名を決定……」こんな若い人たちのためにも、いまだ支部の拠点をつくっておきたいものである。

【東京支部事務所】日黒区鷹番3-16-20
〒152 TEL 03-712-1018 尾沢賢一方
振替口座 東京3-16785
諏訪清陵高校同窓会東京支部

前ページより

じ時に同じ道を歩んだ俺達にしかわからないことであらうか。

無言の君達に励まされ、

叱られ、私達は今日まで生きてきた。不幸なことに同期の友も既に三人の方々、花岡武彦君、丸茂君、両角君が若くして交通事故や病気でなくなられてしまった。せんない線言ではあること

はわかってはいるが、君達にも一緒に生きていてほしかった。北原よ、野明よ、そして飯田よ、中沢よ、あの時の諷中甲飛十三期十四期、十五期の心と姿は一人ひとりそれぞれでなければわからないことなんだ。それを生きていて語ってほしかった。君達の子供にそれを伝えてほしかった。恋も知らず君たちは人にのぼってしまった。悲しい、くやしいことだ。

あれから三十二年、甲飛のことを克明に書いた本も出版された。記録もかなり正確だと思う。分析や追想は人それぞれだから、必ずしも百パーセント同感でないかもしれないが、そんな

本も一緒に読んで、あの激しい空襲にさらされた猛訓練の日々を共に語りたかった。

さて思い直してふりかえれば、今この諷中も美しい山河が残っている。そして日本は世界の国々の中で工業技術の国としても、一般文化の面からも、また経済的にもアメリカや西ドイツと並んで評価されるようになった。せまい国土に一億一千万人の人口をもちながら、ヨーロッパの先進国や世界の大国に伍してドル、マルクと並んで円が強いという現状だ。それからもう日本の全人口の半数以上は戦後の出生者ということになった。私達の子どももそれぞれ十代から二十代になつてきた。世の移り変わりはめまぐるしく激しい。この変わりゆく日本の姿を神やみ仏の目でなく、人間の目と立場で君達にも見てほしいと思う。この三十二年間私達もそれぞれにいろいろな生き方をしてきた。一生懸命自分を見つめ社会を見つめて、みんな元気でしっかり歩いている。戦後も大

空をとびつづけて三十年を過ぎた人もいるし、營々と自営で仕事をしている人もいる。会社づとめをしている人、著述関係の人、自由業の人、学校の先生、公務員の方、公社の人、そして農林業等々、それぞれに故郷で東京で、あるいは全国各地で活躍している。みんな俺達の青春の価値は不滅だと自負している。それはこの美しい国土に残り、次の世代が芽生え、俺達でなければできなかったことを純粹にやり遂げたという信念があるからだ。国を守り親を守り、次の世代を守るために、その時にしるべきことをその時に歩き得る道をまっすぐに進んだとしか

今となっては言い得ない。それは心も体も命もすべてをかけた道だった。そして皆さんは尊い命を青春のすべてを捧げられた。何としてでも生きていてほしかった。君たちや私たちの歩いた道とその気力と、その自己を愛するが故に、その自己を生み育ててくれた親を、国士を守るという使命感と切迫感とそこ迄達した安心立

命の結末を見とどけてほしかった。日本の国はよくなつた。未解決で困難な課題はまだいくつもある。これからも新しい問題は出続けたらと思う。しかし私達がこの諷訪の自然の中で培い、あの清陵で自らを鍛えた真の自由と、それを求めての生き方の確かさと力強さは今この国を支え次の世代を育てていると思う。それをしっかりと見つめいささかなりともそれぞれの仕事を通じて社会人として携むことなく、おそれることなく生きつづけることがあとに残された者、今日皆さんの御霊の前に集まった者の使命だと思えます。それを前に誓います。

北原君よ、野明君、飯田君、中沢君よ、あの就職ラッパがきこえますか。安らかに生きていていつまでも若々しく、空の荒鷲の王子として眠り給え、そして時に故郷へそれぞれの御実家へ舞いおりて、その翫を休め、御遺族の方々の幸せを守り給え。久々の面会で一同方感胸中を去来しております。諷中甲飛十三期、十四期、

十五期の心はいつまでも若く、そして未来永劫一筋に生きつづけております。真の平和と人々の幸福を求めつづけるために御冥福を心より祈ります。

昭和五十二年八月二十日
清陵甲飛会
会長 奥原利夫

昭和二十七年の卒業（五十二・五十五回）生の卒業二十五周年記念同級会が九月十日諷訪市湖畔亭に、新村幸治、宮下琢郎、鮎沢重行、牛山正雄、矢島子郎の各先生を招いて開かれた。同日は、東京を初め、北海道、九州など全国各地から約百人の同級生が出席、同級生の岩波映画教育部監督、諷訪厚君の制作した「八ヶ岳のチョウの生態」（カラー一時間）を鑑賞したあと宴会に移った。終戦直後の混乱期には校での学生々活を過ごした年代で、当時の思い出話に花を咲かせ、旧交を温め合っていた。なお同学年では毎年同級

会を行っているが、三十周年に当たる五十七年には、特に盛大に行う予定で、幹事会を設け、夫人同伴など開催方法を検討することに

25周年記念

52・55回同級会

昭和二十七年の卒業（五十二・五十五回）生の卒業二十五周年記念同級会が九月十日諷訪市湖畔亭に、新村幸治、宮下琢郎、鮎沢重行、牛山正雄、矢島子郎の各先生を招いて開かれた。同日は、東京を初め、北海道、九州など全国各地から約百人の同級生が出席、同級生の岩波映画教育部監督、諷訪厚君の制作した「八ヶ岳のチョウの生態」（カラー一時間）を鑑賞したあと宴会に移った。終戦直後の混乱期には校での学生々活を過ごした年代で、当時の思い出話に花を咲かせ、旧交を温め合っていた。なお同学年では毎年同級



会を行っているが、三十周年に当たる五十七年には、特に盛大に行う予定で、幹事会を設け、夫人同伴など開催方法を検討することに

原田福太郎さん

第四十三回生・原田福太郎さんが八月十一日午前六時三十二分、五十四歳で死去した。清陵高校同窓会は自分の仕事をなげうって同窓会のために尽くしたかけがえのない人を見失った。

原田さんの葬儀は八月二十日、諏訪市岡村の法光寺でしめやかに営まれた。広い本堂に会葬者が入りきらぬほどの盛況で、沈痛な面持ちの友人、知人、その他関係者らが故人の遺徳をたたえていた。

【同級生代表の弔辞】
原田君、今ここにこうして物言わぬ君の遺影に向かつて、私が何かを語りかけなければならぬなどと、どうしても信じられない。なぜ君はこんなにも早く私達の前から姿を消してしまっただのだ。この年で私が君のために弔辞を読まなければならぬなんて、運命はあまりにも残酷である。

四十年にわたる君との交友を振り返ってみて、私は君に話しかけた事が山ほどある。でも今日は友達思いだった君についてだけ語りたい。君は八高から東大へとエリートコースを進んだ。そのこと自体輝やかしい経歴には違いないが、君の生涯をさらに光輝あらしめたものは、君が今日まで歩んで来た人生の生き方そのものだったと思う。君は人生を誠実に生きた。仕事を愛し、家庭を愛し、

のだ。

仲間が集いがある時、その中心にはいつも君がいた。私は君ほど友人のためを思い、恩師を慕い、友情の尊さを、師弟の愛情の尊さを教えてくれた人を知らない。君はよく友人の家を訪れ、また君の家に友人が集まり、深更まで人生を語り、社会経済のいろいろな問題について話に花を咲かせたものだった。

そんな時の君は談論風発その場の話をリードしたものだ。そんな時の君は本当に生き生きとして、いかにも幸せそうだった。そこでは社会的富も名声も無縁のものであった。

恩師を友人を愛した。常に真理を深求し、向上心に燃えていた君は、膨大な読書を通して一日たりとも勉強を怠ったことはなかった。君の深い哲学的思索と透徹した理論は実社会に出て、ますます磨きをかかれ、アイタリティに富んだ実行力が私達仲間をけん引車となつて、クラスの団結の中心的存在になつて行った

と命名したのも君だった。

この大変な仕事に敗て君は挑戦した。しりぞみする仲間を叱咤し、その仕事もボツボツ軌道にのりかけた来たというのに。また君が推されて委員になった清陵の八十年史も、その完成が数年後に約束されている矢先だった。これも君が商売をなげうって情熱を傾けて取り組んでいた仕事だった。君にはまだ、こんなにもやりかけた仕事があったのに、その完成を見ずして志半ばに到れた君はさぞ心残りだったと思う。しかしこの二つの事業は必ず立派に完成され、君の生前に報告する日の近いことを確信している。

君のような人は大寿を全うしてクラスの全員の最後を見届けてから、この世を辞すべき人だったのだ。原田君、今や幽明界を異にした君に対し、どんな言葉もただ空しく、なんの慰めにもならない。

君が愛読していた小泉信三先生の言葉を借りれば、私は君のような友達を持つ

たことを誇りに思う。そしてもし再びこの世に生まれ

て来ることが出来るならば、また君のような友人を持ちたいと思う。これは私共クラスメートも所同じ思いであらう。今は、君の霊よ安らかにと冥福を祈念し、我ら仲間の上に加護を与えてほしいと念ずるのみである。昭和五十二年八月二十日 清陵高校第四十三回入学 思山会代表・小口進一郎

赴報

- 3回 片倉武雄 52・6
- 28回 増崎権六 51・7・11
- 17回 味沢泰造 52・2・13
- 30回 今井重雄 52・3・16
- 12回 上島清信 52・1・15
- 24回 藤森正巳 52・7・14
- 5回 笹岡末吉 52・1・26
- 35回 山口忠世 52・1・20
- 32回 小林成史 52・7
- 64回 小松照房 52・1・18
- 波多野通敏 52・7・5
- 藤森成吉
- 43回 原田福太郎 52・8・11
- 36回 矢崎正康 52・4・8
- 36回 五味吉春 51・12・15

片倉武雄さん

明治三十年入学・第3回片倉武雄さんが、さる六月二十四日、東京武蔵野市の自宅でなくなられた。九十四歳。岡谷市川岸出身で初代片倉兼太郎氏の甥、片倉製糸紡績常務、丸興工業社長、松商学園理事長、川岸村長などを歴任、丸興工業会長の現職にあった。

波多野通敏さん

諏訪市出身、七月五日東京豊島区の自宅で死去。東京帝大哲学科卒。昭和八年から四十二年間立正大学教授。古代ギリシャ哲学の権威、哲学の基礎、アリストトレスの存在論などの著書がある。

金子淳一郎さん

第40回・金子淳一郎さんは九月二十九日、東京練馬区の自宅で死去。信毎、読売新聞記者を経て自民党交友クラブ事務局長などをつとめた。

小沢俊雄さん

小沢俊雄先生が、薬石効なかついに逝去され、十月十一日正願寺において葬送の式が行われました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

藤森成吉さん

藤森成吉氏が去る五月交通事故により亡られた。藤森氏は人も知る作家であり、処女作「波」からはじまって幾多の著作があり、最近では「詩歌曼陀羅」がある。とくに「何が彼女をそうさせたか」は昭和のはじめ流行語にまでなった。

（竹ノ内省三氏談）

諏訪時代、毎年平均点九十五点という成績で、もちろん首席、級長の栄位に終始し、私たちは爪のあかをせんじて飲みたいなどと思いが、負けぬように勉強しました。もちろん追いつくわけはありません。そしてどうしたら平均点九十五点という成績をかちとる事ができるだろうか、みんなどうわさしたものでした。それから間もなく、先生が処女作「波」を出版、続いて「何が彼女をそうさせたか」を出版され、洛陽の紙価を高からしめ、いっそう崇敬の念を抱いておりました。